



僕とアスファ
の夜

江苏正业学院图书馆
藏书章

The Night of My Asphalt
by Arira Sudoh

須藤
晃



僕とアスファルトの夜

須藤 晃

1990年11月25日 初版発行

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 東京3-195208

TEL 営業03-817-8521 編集03-817-8451

印刷／暁印刷株式会社

製本／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-872609-9 C0093

僕とアスファルトの夜

僕とアスファルトの夜……………	5
時計仕掛けの恋……………	49
ストローク……………	95
プリンセス・グッズ……………	141
ベイビー・シャワー……………	189
あとがき……………	222

The Night of My Asphalt

Akira Sudoh

"The Night of My Asphalt"
"Clockworked Love"
"Stroke"
"Princess Goods"
"Baby Shower"

Cover by Teruhisa Tajima/Tajima Design

©1990 copyright by Akira Sudoh
All rights reserved.
Distributed by Kadokawa Shoten
Printed in Japan

僕とアスファルトの夜

“The Night of My Asphalt”

僕は水族館が嫌いだ。九歳の頃溺れかけた経験がある。紺色の海水の濁流にまかれて地獄を見ていた。それ以来僕は水中を恐れる。年に数回は窒息する夢を見る。それなのに海の波のリズムを聞くのが好きだ。胎内で聞いていた母親の鼓動のリズムと波の周期が似ているから心が落ち着くという話を読んだことがある。動物園や水族館では、僕には深い悲しみの慟哭が聞こえる。

ここは、カンガルーと鸚鵡が家主のオブザベクション・シティ・リゾート・ホテル。五つ星。南極とアフリカの海に挟まれている。二十階の窓から見える町並はゴルフ場の中のモデルハウスだ。酸素の濃度が違う。嫌いな女に愛を告白してしまいそうになるような空気だ。美味しい鸚鵡のスープが飲みたかったら、腹を狙わずに頭を狙って撃てと陽気なアメリカン・ツーリストに教えられた。鴨料理と違ってスープぐらいにしかないから、腹に弾が入ったら使いものにならないらしい。この国では害獣は嫌われるだけではなく食べられてしまう。カンガルーの玉袋の財布までも売っている。中身はどうしてしまうのだろう。

僕は去年の十一月に自動車免許を取得した。なんと六か月もかけてである。卒業検定の後で、鼻の真つ赤な指導員が「車の運転は生れ付きむいているやつとむいてないやつがいるが、きみは

むいてない」と断言した。余計なお世話だ。何なら最初に轢き殺してやろうかと言いたいになるのを感じと堪えた。そんなことを言う前に、ともかく日本は車を走らせる環境にはないじゃないか。検定する技術を発揮するような場所の問題を考えているのか。だからオーストラリアに行くんだ。左側通行で右ハンドル。道は広いし車は少ない。八割は日本車でしかもオートマティック車。僕は南国の黄昏の乾いたアスファルトの上を初心者マークもつけずに百二十キロで飛ばしてやる。そう決意したのだ。

レンタカーも国際免許証なしで日本の免許を提示すれば貸してくれるしプライスも安い。ホテルのフロントの脇のバジェットでいきなりTOYOTAカローラをチャーターした。もっと馬力のあるのにしなかったのだけど、その時あった種類の中では一番良かったのを選んだ。

町中を走っている車も、この国では車検がないせいかなオンボロなものが多い。日本みたいに十台すれ違うと、ソアラ、シーマ、BMW、メルセデス、それもピッカピカのことではない。カローラだって小金持ちの車である。

ホテルのカフェテラスでドライシエリーを二杯あおってシーフードサラダのシュリンプだけをつまんで南極へと続くうす青い海を見ながら、僕はスペースシャトルへ乗り込むような気分になっ
ていく。

封筒に入ったキーが届けられる。まるでチョコレートの銀紙を剥くようにニコニコしながらバジェットマークのキーを取り出し、握り締める。横浜の山下公園の近くで撥ねそうになったお爺さん。あの時はゴメンナサイ。松坂屋の駐車場のコンクリートの柱に傷をつけたのも僕だ。でも

見ていてほしい。くわえ煙草でアクセル目一杯踏み込む姿を。

僕はレコーディング・プロデューサーである。一年の三分の一は穴ぐらのようなスタジオに閉じこもっている。そんな生活を十年以上続けて残された置土産は自律神経失調症と慢性太陽カタル。少しは面白い経験もしたけれど、何の自慢にもならない。それに仕事が終わって外に出るといつも真っ暗っていうのは健康に良くない。とくに精神的には。だから普通の人より青空に対しての憧れは強くなっていた。音楽は暗いところで作るものじゃない。夜中の二時や三時に第三京浜で毎日家路を急ぐ。帰ってビールを飲みながらCNNの終わりがけを見てVTRのボルノを何となくかけていつも同じような場面に気持ちをこめて。馬鹿みたいだね、まったく。

子供たちや女房が友達や近所の奥さん連中からタレントのサインを頼まれてくる。芸能界なんて大道芸人のゲマインシャフト。排他的で独善的。ネゴシエーションとあぶく銭の世界だ。サインなんてマネージャーの付き人みたいなタコが書いているんだ。

大体二十二日もたまってしまうていた有給休暇を消化しようというのが最初のきっかけだった。三年たつと自動的に消滅してしまう。使わないと無効になる。十年もサラリーマンをやっている今年初めて知らされた。有給休暇をまとめどりしてオーストラリアへ行こうと具体的に決意したのは、総務のキリギリスが土日をいれたら一か月は休めますと偉そうにアドバイスしてくれた時だった。

「君はどうしてるの?」

「私は一週間ぐらいたからグアムとハワイが限度です」

「田舎に帰ったりしないの？」

「誰の？」

「だから文明堂のカステラとかナバナとか虎屋の羊羹とかお土産に持ってさ、故郷へ帰ったりしないの？」

キリギリスは羽根を擦り合わせるようにブツブツ言いながら尻を振り振り歩き去る。

決めた。南十字星をフェンダーミラーに見ながら、星降る町並を疾走するんだ。煙草くさいオフィスを逃れて、家族も同僚も上司も置き去りにして。

「パパ、オーストラリアへ何しに行くの？」下着や靴下などの身の回りのものをバッグに詰めていると息子が聞いた。

「コアラを捕まえに。ついでにカンガルーも二、三匹持って帰るよ」

「僕、コアラだけでいいよ」以前、金沢文庫の自然動物園にコアラが来たというので、せがまれて連れていったけれど、ユーカリの葉を食べて酩酊してほとんど眠っていた。

「可愛いわねえ。人形みたい」妻と長女は嬌声をあげた。

「詐欺だよ。あれ死んでんじゃないの。ほら、動けよ」ガラスのケースをドンドン叩いていたら係員に注意された。

動物なんて可愛いと思ったことがない。人間も嫌いだと言葉を理解できない犬も猫も豚も虎も象も蛇も虫も全部好きじゃない。弱肉強食なんて理不尽じゃないか。

「動くコアラだよ」息子が念を押した。長女の依頼はオーストラリアのコイン。妻はビーフジャーキー。近所に配りたいから数は多めに、安くてもいいから。富山の薬売りじゃあるまいし、お土産探してフラフラしている時間はない。

「今度のチケットはディスカウントのディスカウントで帰ってくる便は変更できないから八月の三十日には必ず戻るから」

「夏休みが終わっちゃうよ」

「オーストラリアの子供たちは冬休みが終わっちゃうね」

地球は丸い。北斗七星と南十字星。僕は星に魅せられて宇宙へ巻き込まれていくのだ。

「最近飛行機がずいぶん墜ちるみたいだから気を付けてね」妻はリングを口いっぱい頬張りながら言った。アリガトウ。ただどうも気を付けるっていうんだ。オフクロの送ってくれたお守り以外は何もない。最後はいつも神頼みだ。ローテーションがあるから出来の悪いパイロットや二日酔いの副操縦士にあたればこれはしょうがない。

「明日出発が早いからそろそろ寝るよ」

それでも、僕はなぜか朝まで汗にまみれて眠れなかったのだ。

ワインカラーのカローラはホテルの駐車場の薄暗い中で居眠りして待ち構えていた。ドライシエリーが僕をF-1レーサーにする。シャワーで洗ったばかりの髪先から落ちているのが水滴なのか汗なのか解らない。気持ちが高揚してきていて、戦闘的になっていく。

ゆっくりと駐車場の出口の急な坂を登り切るとバレット・サービスのおもちゃの兵隊みたいな

服装のボーイが手招きをしていた。

「ハヴ・ア・グッダイ」

僕はオーストラリア観光局から裏金をもらってゐるわけじゃないし、オーストラリア自体に特別な思い入れはない。表向きの理由は先にも言った諸々のことだが、本当の理由はカンガルーを殺すためにやってきた。

カンガルーのことは少し説明しなくてはいけない。というのはカンガルーは僕にとっては他の動物とは違う存在なのである。三メートルカンガルーというのがかつていて今は絶滅している。子供の頃にこの三メートルカンガルーの話を本で読んでから夢にうつつに空想のディノザウルスの世界に主演クラスで何度も登場し、オーストラリアといえはこの三メートルカンガルーの影がちらつき、挙げ句の果てには頭の中に居るもう一人の自分というのがいつもこの恐竜のようなルックスで現われて、僕の青春期に多大の影響を与えた。

カンガルーはそんなに簡単に殺せるものだろうか、ずっとそう思っていた。カンガルーはひょっとしてオーストラリアのシンボルとして日本で言う天然記念物扱いをされて重宝にされガードされているのではと誰もが想像するように考えていた。例えば日本で丹頂鶴や日本カモシカや西表山猫を自由に捕獲したり殺したりは出来ないし、インドで象や牛を追っ掛け回すなんて考えられないのと同じようにオーストラリアでカンガルーはと考えていたのである。ところが豈図らんや、カンガルーは害獣ナンバー・ワンなのである。殺してありがたがられることはあつても処罰

などのお咎めはなしと聴くに及んで、俄然心が高鳴った。三メートルカンガルーの亡霊を退治する勇氣も湧いてきたのである。

仕事が二、三年前から思うようにいなくなっていたこともある。そもそもその仕事の行き詰まりは精神的なスランプで、いろんな治療じみたことを試みたが効果がない。スランプというのは病氣なんだよって教えてくれる友人がいて、病氣なら原因があつて治療が必要だから頭痛にはアスピリンを飲むようにオーストラリアへやつて来た訳だ。そしてそこで僕の中に居座り続けているあいつを消し去ってみるのがスランプ脱出のきっかけになるかもしれないと考えた。良薬は口に苦しというけど何か苦しいことが待つてる予感はずっとしている。

ラジオがサンバだ、このリズム。陽気に行くんだ。ハンドルを叩きながら、口笛を吹いて、さあ行け。

百メートルくらいあとから4WDが付いて来ている。車種ははっきりしないがびったり距離を保っている。六十マイルで走っていれば六十マイル。七十なら七十。レーダーで追走しているように正確だ。カンガルーの視線を気にしていたせいかな、殺氣を感じて氣味が悪い。

そういうええさっきホテルのロビーにいた女も、日本人なのは間違いないけれど何か氣になった。見た目は旅行者風ではないし現地のコーディネートターといった場慣れした感じもない。モデルとかアーティスト然ともしてないし、不思議な雰囲気の子だった。いわゆるロビイストだろうか？それともこんなところまで来て商売してるのかな。

人の個性を吸い取ってゆくホテルのラウンジ。商談。懇談。飲談に閑談。ちょっと気のはった話をするには欠かせない場所だ。決して静かではないのに、よそいきのムードが漂っていて、上品で非日常的で秘密の匂いはするが、完全にクローズでもなくオープンでもない。宿泊者でなくても余裕のある人種に見えるし、万が一喧嘩になっても目撃者がたくさんいるし、公の場で大声を出すなんてはしたくないことだから大げさになりにくい。殴られて半身不随や死体になって放置される心配もない。ロビイストは臆病なやつが多い。それはさておきあの大きなバッグの中身は何だったんだろう。

車を止めて待機するとさっきの4WDがなんとびったりと後ろに止めてきた。友達が追いはぎに身ぐるみ剥がされた話を思い出して冷汗が一瞬出てくる。まいったなあと思ったらホテルにいたあの女が一人で降りてきた。絵に描いたようなワンレン・ボディコンだった。

「どうしたの、まいったな。いや、ドウ・ユー・スピーク・ジャパニーズ？」一方的に日本人だと決め付けていたものだから大恥をかいだと思っただけなり「こんにちは」と、会釈した。

「あなた村上龍でしょう？」女の声は死ぬほどセクシーだった。

「違うよ。俺はそんな男じゃない。今ここに居る俺はとくにね」名前で識別されるのが厭で、不特定なただの男になろうと、オーストラリアに来てると言いたかったのだが女は誤解したようだった。

「嘘言っても解るわ。機内のビデオであなたがゴルフを解説していたもの。それだけ日に焼けていればスポーツマンじゃないとは言えないわ。まあそんなことはどっちでもいいことなんだけど。

うふっ」

女の話を要約すればオーストラリアにはバカンスで来たが、ハンディカメラで何かをVTRに記録しようと思い、獲物を物色中にホテルで目のキラキラした僕を見つけて決めたと言うのだ。そしてその男が村上龍だと思い込んだのだ。

「だってテニスじゃなくてゴルフだったんだろ？ それに彼は作家だよ。こんな時にこんな所で一人で居るわけがないじゃないの」

「あなたは私にとつての村上龍なの。それ以外には何の深い理由もないの。私の感性には必要なターゲット。それだけよ」

「俺なんか撮ってどうするの？」裸で絡み合うならまだしも埃^{ほこり}っぽい大陸を彷徨^{さまよ}っている男を撮ったってどうなるというんだ。こんなひとつこ一人いないシチュエーションで身の危険を感じないのかい。これでも結構理解されにくい男と評判なんだ。衝動的で思いつきがすべてみたいな仕事やってるから。強姦^{ごうかん}されるの覚悟ならいいよと目一杯すごんだら、あっさりいいわよって答える。

「それじゃあますとこなく撮ってよ。これから起こること全部。プリーズ・フォロー・ミー、ミス・ムムム？」

「カナコよ」

「オーケー、ミス・カナコ」

何だかんでもないレポーターが登場してしまったがいい女なので勿論^{もちろん}問題などない。オース